

授業概要

本講義では、メディア文化についてその代表格ともいえるべき「映画」に焦点を当てて学びます。今日、テレビ、インターネットというようにメディアと呼ばれるものには様々なものがありますが、その中でも映画は今や写真と並びクラシカルなものの1つとなっています。

映画は、19世紀末の欧米で写真技術を発展させる形でサイレント（無声映画）として誕生し、その後、国境を越えて様々な国において、サイレントからトーキーへ、モノクロからカラーへと技術的に発展しつつ、美学的にも常に更新し続けてきました。本講義では、その映画の誕生から今日に至るまでの映画の発展を追いながら、約120年にわたる映画史を概観することでメディアとしての映画のあり方について考えます。

授業計画

第1回	ガイダンス	メディアとしての映画
第2回	初期映画	映画とは何か？
第3回	ハリウッドの誕生	「夢の工場」のはじまり
第4回	アヴァンギャルド映画	フランス純粋映画とドイツ表現主義映画
第5回	ソヴィエト・モンターシュ理論	エイゼンシュテイン『戦艦ポチョムキン』を見る
第6回	ハリウッド映画の黄金時代	ミュージカル映画とギャング映画
第7回	イタリア・ネオレアリズモ	終戦直後に生まれた新たな映画表現
第8回	日本映画の黄金時代①	黒澤明と溝口健二の海外進出
第9回	日本映画の黄金時代②	小津安二郎の芸術
第10回	フランス・ヌーヴェルヴァーグ	「作家主義」とは何か？
第11回	アメリカン・ニューシネマ	アンチ・ヒーローの登場
第12回	ハリウッド・ブロックバスター	『スター・ウォーズ』シリーズ誕生の背景
第13回	台湾とイランのニューシネマ	映画の多様化＝グローバル化
第14回	ジャパニメーション	宮崎駿とリミテッド・アニメーション
第15回	映画のデジタル化と3D/4D映画	これからの映画について
第16回	筆記試験	

到達目標

映画史の大まかな流れを把握しつつ、映画論やメディア論の基本的な概念や理論を習得し、それらの概念や理論を使って身近なメディア文化（小説・写真・映画・テレビ・マンガ・アニメ・ゲーム）について過不足なく論述できるようになる。

履修上の注意

毎回、授業の終わりに、コメントシートに授業の簡単なまとめとそれに対する自身の考え・意見を書く時間を設ける。なお、正当な理由のない遅刻は、コメントシートによる評価点を受けることができない。コメントシートの他にも、口頭での質問など、積極的な授業参加を望む。

予習・復習

毎回、予習として、指定する次の授業に関係するテキストの一部（基本的に1章分）を読んでくること。また、期末試験（論述形式）に備えて、毎回授業で学習した重要な概念やタームに関しては自宅で復習すること。

評価方法

毎回の授業でのコメントシート（20%）、講義内で提示される課題（30%）、期末試験（50%）

テキスト

教科書：村山匡一郎編『映画史を学ぶ クリティカル・ワーズ』（フィルムアート社、2003年、4845903482）
 参考書：四方田犬彦『日本映画史110年』（集英社、2014年、4087207528）。北野圭介『新版ハリウッド100年史講義』（平凡社、2017年、458285849X）。中条省平『フランス映画史の誘惑』（集英社、2003年、4087201791）。他、必要に応じて、講義に関わるプリントを配布する。